
ライダーの世界がもしも一つだったら～ライダーワールド～

sinne-キヨノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライダーの世界がもしも一つだつたら～ライダーワールド～

【Zコード】

Z8328Y

【作者名】

sinnne・キヨノリ

【あらすじ】

そもそも全てのライダーの世界が一つだつたら・・・。そんな作者の想像から生まれた小説です。主人公は誰がどう言おうと剣立カズマと辰巳シンジとかリイマジ。オリジの出番はリイマジと比べると少ないかもです。完全ギャグです。キャラ崩壊も含みます。結構ありがちな設定とか出ますが気にしないで下さい。

一話「カズマのストレス・鈴海姉弟の恐怖」（前書き）

カズマ「で、新小説始まつたけど・・・」

一真「どうしたんだ？」

カズマ「俺が最初から・・・」

一真「ま、それは見てのお楽しみだ」

ララ「なんか似たような小説あるかもしれないけど、これはもう本当に作者の妄想だからね～」

弟切「・・・」

一話「カズマのストレス・鈴海姉弟の恐怖」

彼は、其処に立っていた。

「はあ・・・。今日も遅刻かあ・・・」

青年、剣立カズマは溜息をついていた。

彼はBOARDという会社の社長（代理）。

最近夜が眠れないらしく、遅刻しがちである。

「カズマ。お前今日も遅刻か・・・」

カズマの先輩である菱形サクヤは言った。

「最近アイツらが煩くて眠れないんだよ」

「大丈夫か？」

「まあ、ね」

サクヤはカズマを心配している。

「お前は一応社長代理なんだぞ。ちゃんと健康管理とかしろよな」

「はいはい・・・はあ・・・」

彼はサクヤに言われながらも、溜息をついていた。それは、彼が住んでいる所の隣部屋の人物のせいなのだが・・・。その人物は、カズマの真後ろに居た。

「うわあつー」

「おはようございますカズマさん！今日はソウジさんが社会科見学として僕とアスマを連れてきてくれたんです！」

「すみませんカズマさん。でも楽しそうだったので、昨日は眠れなかつたんです」

「よ、カズマ」

ワタルとアスマとソウジ。

ソウジは実家に住んでるので原因にはなってないのだが、この子供二人。アスマとワタルが昨日色々んちやん騒ぎをしていて眠れなかつたのである。

「お～ま～え～ら～」

「まあまあ、怒らなくて良いだろ？ 実際、一人は今日を楽しみにしてたんだからな」

ちなみに、見学予約はしつかりとつてある。だからこそ、カズマは余計イラついている。

「カズマ、アンデッドがでてく「剣崎さんとムツキ行かせる、俺は社会科見学をしてる子供達の相手をしなくちゃならない」

「カズマ落ち着け！」

「俺は此処の社員じゃないぞ！」

サクヤの言葉にカズマはハツ当たりするよう言つた。

ちなみに、ムツキはともかく、剣崎はBOARDに入り浸つてはいるし、プレイバックルはもつていてるが、BOARDの社員では無い為、ただとばつちりをくらつてているだけだ。

「じゃ、ソウジさん、この一人の子守は俺がしどくんで、ソウジさんはZECT見に行つててください。天道さんが何やらかすか分からませんし、弟切さんは弟切さんで貴方に誤解される事しそうですし、加賀美さんは加賀美さんで熱くなりすぎて色々ありますし。アラタさんも加賀美さんと一緒になつてやらかしそうですし、行つた方が良いと思いますよ」

カズマがZECTの心配をするも

「いや、俺も実はBOARDの中を見てみたかったんだ。まあ、あつちは天道と弟切に任せるとからな。変な事やらかしたらアイツに制裁くらわせるつもりだしな」

「アイツって……。もしかして、鈴海ルルですか？それとも姉の方ですか？」

ソウジは笑つていった。

「どっちもだ」

「それは逆らえないですね……」

カズマは苦笑いする。

* * * * *

所変わつてこちらは鳴海探偵事務所。

左翔太郎と園崎来人ことフイリップが事件の話をしていた。

「翔太郎、今日も事件だよ」

「何だ? 今度は」

フイリップは言つ。

「何だか、不審者つていうか、変な人が出るらしい。発見者の証言によれば、その人の顔は恐怖するほど恐ろしいらしい」

「誰だ?」

「うへん、証言によると、男性で、青い服を着ていて、青いバイクで……」

「分かつた……。剣立力ズマだる。アイツは、最近溜まつてゐるらしいからな」

「今日も、とばっちらりで剣崎さんとムツキがアンデッドの封印に行かされたって」

「おひおひ、ムツキはともかく剣崎は社員じゃないだりつ……」

「顔出してるしライダーになれるからって理由でらしき……」

「はあ……」

そのカズマの行動には、翔太郎も呆れていた。

* * * * *

喫茶店兼宿泊場所のマリンチエリアには、鈴海ララとルルが居る。

「で、ソウジさん【ストップ】頼まれたの? そのまま

「うん・・・断りきれなくて・・・」

「まあ、良いけど。じゃ、NECTに行くよ」

「うん」

二人は、NECTに行く事にした。

～NECT～

「てわけで、ソウジさんに頼まれて、何かやらかしたら私達が制裁
を下します」

ララは弟切ソウと天道総司と加賀美新とアラタに言っていた。
超絶の笑顔で。

「あ、ああ・・・」

弟切ソウはソウジに擬態したワームだ。
ララの使えそудだから生かしておいてといつ葉だけで生きれてい
るワームだ。

ララの言葉の力は多大で、ララに逆らつとまざい事があるという噂がある。

なので、弟切ソウはララに逆らえない。勿論、他の加賀美、天道などもだ。

「何かやらかしたら私の権限で弟切さんの命は無いと思つてください」

その笑顔は超怖い。ちなみに、彼女に悪気は無い。大事な事だからもう一度言つ、先ほどの彼女の言葉に悪気は無い。

天然Sなのだ。

なので、逆に弟切や天道は恐れている。

一体、これからこの世界で何が起るのだろうか・・・？

続く

一話「カズマのストレス・鈴海姉弟の恐怖」（後書き）

ララ「あとがきは作者との対談！」

作者「はい」

ソウジ「鈴海最強伝説・・・」

作者「ララに質問！」

ララ「何？」

作者「ララって、皆の事どう呼んでるの？」

カズマ「作者なら其処分かれよ！」「

ララ「えっと・・・」

ユウスケ ユウスケ君

ワタル ワタル君

シンジ シンジ君

カズマ カズマ君

タクミ タクミ君

ショウイチ ショウイチさん

ソウジ ソウジさん

アスマ アスマ君

五代 五代さん

津上 津上さん

真司 城戸君

乾巧 巧さん

剣崎 剣崎さん

ヒビキ ヒビキさん

天道 総司君

野上 良太郎君

紅渡 渡さん

士 士君

左翔太郎 翔太郎君

フィリップ フィリップ君

映司 映司君

弦太朗 弦太朗君

だよ！」

カズマ「長い説明有難う！」

—「話「映司の苦労・子供達（+ソウジ）の社会科見学（前書き）

映司「一話で早速僕の身に何が……」

カズマ「さあ?」

タクミ「はあ……」

アスム「今日は師匠出しあげだぞこよ……」

ララ「今日は無理かも……」

一話「映画の苦勞・子供達（+ソウジ）の社会科見学

子供一人と三十路は上機嫌だった。
ずっと気になっていたのだな。つ。
BOARDの中身が。

「 」

「子供達はともかく、ソウジさんは上機嫌にならないでください、
なんだか三十路の人�がそんなことしてると正直引きます。えへつと、
こつちは情報管理室です。アンデッドについての情報がびっしり
詰まつてたりするので、あまりこの中には入れないです」

「アスム！見てくださいー！パソコンが沢山あります！」

「パソコン・・・ですか・・・？」あまり機械には慣れていない

「ふむ」

「で、こつちは訓練室です。まあ、特にムツキとか剣崎さんとか色々な人が入り浸っています」

訓練室にカズマが案内した、その行動が、駄目だったのかもしれない。
い。

「カズマさん！訓練ですか！？少しあらせてくれださいー！」

と、アスムがこんな事を言い出したのだ。

「え？」

カズマは驚いた。鬼の修行をしてるとはいっても、こんな子供が大人のやるような訓練をするのは……と思つたのだ。

「大人と同じプログラムにしてください！」

「ぼ・・・僕は遠慮します・・・」

「俺は・・・少しやつてみようか」

「いつで、何故か丁度悪いタイミングで帰ってきててしまった剣崎を巻き込んで、カズマもやる事になってしまった。

「えへっと、じゃあ、かる〜く説明します。まず、模擬戦をします」

「「じんだけリアルな訓練なんですかー!?」」

アスマと見物者のワタルが言った。

「なら、やらなくていいんだけど、アスマ」

「でもやりますー！」

「えつと、この機械の中に入つてやります。この機械は総て連動しているので、まあ、一度俺と剣崎さんとアスマとソウジさんで四人だから一対一で出来るね。剣崎さん」

物凄い笑顔でカズマが剣崎に言った。

剣崎は

(「イツ絶対それ分かって引き止めたな・・・！」
と思っていた。)

ちなみに、チーム分けは
アスム・ソウジ・カズマ・一真
になつた。

「準備はいいですか？じゃあ、レディ・・・ファイツ！」

「・・・・実況兼審判はワタル、解説は俺、相川始でやらせても
いい

『おい！』

意外な人物、始が居た事に剣崎は突っ込む。

「黙れケンジヤキ」

* ちなみに作者は始さんの性格分かつてません

『と/orいか、もう戦闘は始まりますよ！』

「おーっとー余所見をしている剣崎さんにアスムが特攻を仕掛けて
きます！が！」

『つええええええええええ！』

『剣崎さんー危ない！』

「おーっとカズマさんが剣崎さんを助けに入った！解説の相川始さ
ん、これは一体どういう事でしょうか？」

「…………第三のジョーカー候補だな、アイツ」

「ちゃんと解説してください！」

* ちなみにこの小説では剣崎さんはジョーカー。相川さんもジョーカーという設定です。

ちなみに、カズマは全力で否定していたが。

『ふ、剣崎、隙あり！』

「おつと！此処で今まで何もしていなかつたソウジさんが剣崎さんに特攻していきました！」

『つていうか今の声は何だよ！』

「戦っていても全力で突っ込みをするカズマさん！解説の相川さん、これはそういう事でしょうか？」

「・・・・突つ込みとしての本能。体にしみこんでいるのか・・・」

「何ですかその言い方！？」

『つていうか社会科見学は何処行つた!』

『そんなのはもう宇宙の彼方に行きました!』

アスマは少し自重してください！」

「…………（アイツ、本当にジョーカーに出来るな……）」

ちなみに、カズマは何とかんまで剣崎さん守ってます。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

翔太郎

「何だ? フィリップ」

「フィリップは、相棒の翔太郎に言った。

映画が翔太郎に相談したい事がある」とて

— 正月

「どうしたんだ? 映画」

ああ、聞いてくれよ。

「あ、ああ……まあ、じりあえず座れる」

翔太郎は映司を椅子に座らせる。

「で、何だ？ 映司」

「あ、ああ・・・。実はな・・・」

映司は一息ついていった。

「アンクが夜中ずっと煩くて寝れないんだ。そして、外に出たかと思うと、ヘマをするガメル、ウヴァ、カザリ、メズールに毎回出会いつてフォローして、アンクがアイスアイスうるやくで、拳句の果てに飛ばされてきた弟切さんにぶつかって・・・」

「・・・・・。よし、ララの所に泊めてもらえ、あそこなら安全だしな」

「アンクには、僕たちから言つておくれ」

「うん・・・頼む・・・」

続く

一話「映画の苦勞・子供達（+ソウジ）の社会科見学（後書き）

意外に社会科見学の話が・・・。

飛ばされてきた弟切・・・。多分ララに飛ばされたんだと思います。
何かへマして。それかソウジさんにやられたか、加賀美に巻き込まれたか、天道に振り回されたか。

では、また次回お会いしましょう！

二話「社会科見学終了・天道総司対鈴海ルル（前書き）

カズマ「社会科見学に結構時間使ってるよな・・・」

ユウスケ「・・・」

ルル「それにもしても、まだあまりコツチの様子が出てないな・・・」

ララ「だから今回でるんだよー！」

三話「社会科見学終了・天道総司対鈴海ルル

「えつと・・・。じゃあ、次は・・・」

「僕、社員食堂に行つてみたいですよ!」

カズマの言葉を遮つてワタルが言った。

「へ? 何で?」

「だつて、どんなとことか見てみたいんですよ!」

「あ、僕も見てみたいですよ! それに、土さんと師匠がはじめてあつた場所ですし!」

「は・・・はあ・・・。ソウジさん、剣崎さん。其処で良いですか?」

「ああ」

「良いけど・・・。でか俺も一緒に行く前提なのかよ!」

何気に巻き込まれてる剣崎はともかく・・・一行は社員食堂に行く事となつた。

「・・・ソウジ、剣崎さん」

「・・・頑張れよ、剣崎」

ちなみに、陰からムツキとサクヤ、それに何故か橘も剣崎を見守っていた。

* * * * *

「じゃ、NEOJUのみなさん ちゃんと仕事をしてくださいね！」

「しない」と締める

「ある意味恐怖だな・・・」

「俺は誰からの指示も受けない。俺は俺の道を行くだけだ」

「天道、この二人には逆らつたら駄目だつて……。はあ……」

「加賀美は大丈夫だと思うが、だつて、一応、トップの『子息なん
だしさ・・・」

ゼクトルーパーの皆さん、弟切、天道、加賀美、アラタの順番で喋っている。

本邦には「アヒト川川」
せなみに 加賀美の父がZEBUTのトツアな為
は最初から加賀美に手出しそうつもりは無い。

「じゃあ、最初は訓練しましょう」

「・・・・・あの・・・ソウジからの・・・言葉なんだ・・・。逆らつたら・・・まず弟切は・・・無事じや済まないつて・・・。分かつてるよな・・・。クロックアップして・・・。ボコつて・・

・くるかも・・・「

「？」

「いや、ルル。ソウジさんはそんな事しないって・・・」

元談たよ

ルルの言葉に、弟切は冗談じやない気がしつつ、訓練をする事にした。

・・・・・ララちゃん、ルル君・・・居る・・・?」

あ
映画見て
どうしたの?元気なしけど

「元気かな」といふが……生気が無いに近い……」

半分死にかけの映画がアーティストの所へ来た。

一
大丈夫！？
」

「何だよその咳のしかた！」

ララが心配する横で加賀美が映司の咳に突つ込む。

「じゃあ・・・私達の家に泊まる？　あの人達には私から言つておくから。彼等には煩くしたら駄目つてきつへ言つておくから」

「うん・・・あり・・・が・・・と・・・」

ハタン

映画は一瞬に呪われた

ちなみに、ララとルルがその場を離れた為、サボつていたら制裁するという条件付きで各自仕事をする事となつた。

* * * * *

一方 BOARDでは、意味不明の料理対決が始まっていた。
それまでの経緯は・・・。

『おソウジ』

津上が、何故お前が此処に居る?』

『ああ、実は、何回か此処で見てるんだよ。社員食堂の料理とか色々

成る程な

で、ソウジ。お前におでん対決を申し込みたいんだ

『ああ、いいが』

という事で、おでん対決・・・もとい、料理対決が始まつたのであつた。

「俺達を無視して話を進めるな————！」

カズマの渾身の突込みが入る。

「まあ、良いじゃないですか。僕達も一度お腹が空いてきた頃ですし」

「はあ・・・・分かつたよ」

「よし、行こう、ソウジ」

「何処からでも掛かって来い」

「よーいつスタート！」

そして、数十分後

「はい、これが俺のおでんだ」

「天堂屋の伝統のおでんだ。具が少ないとか言つなよ

～色々すつとかばして結果発表～

「で、結果は？」

「…………ソウジさん」「…………ソウジからの気迫が凄かつた

「はあ……なあ、もう帰つて良いか?気付いたらもう帰る時間なんだが……」「

「あ、確かにそうですね。僕たちもう帰ります」

そして、社会科見学は終わったのだ。
最も、数人は被害にあったようだが。

「…………広瀬さん」

「どうしたの?剣崎君」

「…………俺、疲れました……」「

「…………」

「あ、カズマ君、アスマ君、ワタル君。お帰り。で、ごめんけど、
今夜はあまり騒がないでね」

「何ですか?」

「今日は、映司君を泊めてるの。だいぶつかれてるようだったから、静かにしてね」

「…………」

続
<

二話「社会科見学終了・天道総司対鈴海ルル（後書き）

ララ「ちなみに、カズマ君達三人は私の家に泊まってるの」「
ルル「カズマが保護者代わりなんだってさ」
カズマ「あと一人泊まってるの。まあ、言わないけど、まだ」
ララ「じゃ、時間が無いからさいなら」

四話「シンジの出勤：W龍騎の恐怖（前書き）

シンジ「サブタイトル考えた奴ぼいる」

真司「・・・」

リュウガ『・・・』

*本作品にはリュウガも登場するっぽいです（作者はリュウガについて大して知識はないです＝無謀）

四話「シンジの出勤：w龍騎の恐怖

「遅れる――――――」

青年、辰巳シンジは、急いで出勤していた。

彼はバイクを持っていない為、無論、全力疾走だ。

「あ～もう一あいつら騒ぐなって言われてたのにまた騒いで！あの三人怒らせたら後が無いって分かってるだろ！」

「シンジ～

「カズマ～」

全力疾走するシンジの横を、ブルースペイダーに乗ったカズマが通りかかる。

「今かまってる暇は無いんだ！僕は行くからな！」

「なら、俺が連れてつてやるよ

「いいのかー？」

「ああ、幼馴染のよしみとしてな」

* この小説ではリイマジ組は年齢が近い人たちは大体幼馴染という設定です。

例えばショウイチとソウジ、カズマとシンジとユウスケとタクミ、アスマとワタルとタクミ。

タクミの名前が一つ挙がってる理由はいこません。

「じゃ、ありがたくー！」

そして、シンジはカズマに乗せて行って貰った。

* * * * *

此処はATTASHIジャーナル。辰巳シンジの働いてる場所である。

「レンセーん！遅れてすみません！」

「ああ、シンジか」

彼は羽黒レン。辰巳シンジのパートナーである。
このセー、ホモとか言ひんじゃない、ヤンデレとか言ひんじゃない。

「どうしたんだ？遅れるなんてお前らしくないな。ま、行くぞ」

「はーーー！」

* * * * *

「はー、今日は休みかー

城戸真司はORANGEジャーナルといつといふで働いてる、だが、今日は特別休暇を貰つて暇にしている。

現在、ブラブラとしている。

「あ、城戸さん」

「あ、えっと・・・。シンジの幼馴染の一人の・・・」

「小野寺コウスケです」

「あ、そうそう。で、どうしたんですか?」

*ちなみに作者は龍騎未視聴の為、城戸さんの性格これで良いのか分かりません・・・。

「いえ、なんでもないです。見かけただけなので」

「あ・・・はあ・・・」

そう言ってコウスケは去つて行つてしまつた。

「一体、なんだつたんだろう・・・」

* * * * *

「ふ〜、今日も取材終わつた〜」

「シンジ」

「あ、何ですか?レンさん」

「今日はもう帰つて良いぞ。城戸は今日特別休暇で暇してゐるからな、相手してやれ」

「はーい」

* *

「あーべーん」

遠くから辰巳シンジが走つてくる。

「あ、シンジ。どうしたんだ？」

「レンさんと城戸さんが暇してから相手してやれって

「へえ・・・」

「うーん。そうだ。マリンチエリア行きますか？」

「え、ラリサちゃん達に迷惑じゃないかな・・・？」

城戸はそのまま連れてマリンチエリアに来た。

「あ、シンジ君おかえり~」

「城戸・・・・・ひしがい・・・」

「相変わらずルル君は無愛想だな~」

城戸は苦笑いつつ席に着く。

「あれ? いつも居るアスム君とワタル君は?」

「プロティラに制裁を下される途中だよ」

「ハナちゃんがそう言つて、よく耳を澄ましつみると。。。

「あ、やめてくださいー！映同さんー田を覚ましてくださいー！」

「めんなやー！ やはりませんからー！ やはり夜に黙りますからー！」

誰が許すか・・・アンクやメズール達にやられてる分、此処では
静かに寝れると思ってたのにな。ララちゃんがなんに言ってた
のにな。何してんだてめええええらあああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ
!-----!

「うてこい輔で」

「…つていう事でで済む問題じゃないだろー。」

Wシンジは突っ込んでいた。

「子供に何してんだあの人！」

一人は思わずその場所まで走っていた。

「映司！やめろ！」

「子供に何してるんだ！」

「俺様の眠りを妨げる者はあ、誰一人としてゆるさねえ……」

「——も、誰だよアソタ！」

二人は、映司を止めるにはこれしかないと、変身していった。

えりいじ 少し落ち着こうな

「アスマ君達は仮面ライダーとはいえたま子供・・・子供にお前は何してるんだろうなあ・・・」

映画はその身をもって知るのだ。たゞ

龍騎を怒らせた罰を

! ! ! ! ! ! ! !

続
<

四話「シンジの出勤・w龍騎の恐怖（後書き）

ララ「映司君の受難？」

ルル「映司が怒るのも仕方ない」

映司「何あれ龍騎怖い龍騎が怖すぎてどうしようもない・・・」

ブツブツ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8328y/>

ライダーの世界がもしも一つだったら～ライダーワールド～
2011年11月27日20時48分発行